

江戸時代に作られた竹取物語絵の世界

—富士山の絵画化をめぐる—

〈静岡県富士山世界遺産センター准教授／立教大学日本学研究所特任研究員 青木 慎一〉

前回担当した富士山世界遺産コラム vol.32 では、江戸時代に作られる竹取物語絵の制作過程や作品ごとの絵の違いなどについて紹介しました。このコラムにおいては、江戸時代に作られた竹取物語絵から、富士山が描かれる3作品を取り上げ、絵の細部の読み解き方についてお話しします。

まずは、物語の結末がどのように語られるかを確認しましょう。帝は臣下たちを集めて「いづれの山か天に近き」(訳:どの山が天に近いか)と問うたところ、ある者が「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る」(訳:駿河の国にあるといわれる山が、この都にも近く、天にも近うございます)と奏上そうじょうしました。それを聞いた帝の行動は、以下のように語られます。

駿河の国にあなる山の頂に持てつくべきよし仰せたまふ。峰にてすべきやう教へさせたまふ。

御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。(訳:駿河の国にあるという山の頂上に持ってゆく旨をご命令になる。そして、その山頂でなすべき方法をお教えになる。お手紙と不死の薬の壺とをならべて、火をつけて燃やすべきことをご命令になる)

『竹取物語』といえば、月から迎えが来たり、月に帰ったりといったかぐや姫が登場する場面がよく知られていますが、物語はその後日談までを語っています。そして、現存している『竹取物語』の絵本や絵巻においても、月からの迎えや昇天までの絵しか描かない作品が少なくありません。その中で次ページに絵を載せたセンター所蔵の「竹取物語」(奈良絵本断簡)と立教大学図書館が所蔵する絵本・色紙貼交屏風の3つは、物語の結末を絵画化する作品として注目されます。

物語の展開に従って話を進めると、立教大学図書館の絵本と屏風の絵は帝が勅使ちよくしを富士山に派遣することを決める場面、センターの絵本の断簡は富士山で手紙と不死の薬を焼く場面を描いています。立教大学図書館の絵本と屏風の絵はほぼ変わらないように見えますが、細かな描写に着目すると、その違いに気付くことができるでしょう。

絵本と屏風の絵は、いずれも画面左上に富士山、画面中ほどに昇天する天人てんにん、画面下に帝の仰せで臣下たちが集まった宮中を描きます。しかし、絵本と屏風では天人の描写に違いがあります。絵本は4人の天人が描かれますが、右から2人目の人物を3人が囲むように描かれるため、かぐや姫とお付きの天人3人を描いたと読み取れます。一方、屏風に描かれる3人の天人は誰がかぐや姫であるか、明確に描き分けられていません。また、天人たちは蓮華れんげや琵琶びわを手にしています。これらのことを踏まえると、屏風の天人は『竹取物語』の昇天の場面よりも『海道記』や『富士山の本地ほんじ』などに記される「富士山の峰で遊ぶ仙女」のイメージに近い姿で描かれたと考えられます。このように、一見同じような絵であっても、『竹取物語』に即してかぐや姫を特定できる絵本と富士山の伝説にある仙女をモチーフとする屏風という違いが浮かび上がるのです。

最後に、センター所蔵の絵本の断簡を取り上げましょう。画面下に松原や海、霞や雲を挿^{はさ}んで画面上に富士山と山腹に4人の男たちが描かれます。画面中央では壺と手紙が焼かれており、画面右から2人目の男は束帯^{そくたい}の装いで描かれることから、帝^{つか}が遣わした勅使の一行が富士山で文と不死の薬を焼く場面の絵だと分かります。物語は「峰にてすべきやう教へさせたまふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ」という帝の指示までで、実際に燃やす場面を語ることはしません。しかし、センターが所蔵する絵本の断簡は、まさに帝の命を受けた富士山頂での儀式を描いているのです。

以上、富士山を描く3図を概観してきました。センターが所蔵する山頂での儀式の絵は稀少^{きしょう}で注目すべき例ですので、別の機会にさらに深く見ていければと思います。

※『竹取物語』の本文と現代語訳は、新編日本古典文学全集(小学館)を引用しました。



立教大学図書館蔵
「竹取物語」(甲本)



立教大学図書館蔵
「竹取物語 貼交屏風」



静岡県富士山世界遺産センター蔵
「竹取物語」(奈良絵本断簡)

